



(左)日本瓦と漆喰がすっきりとした美しい佇まい。格子の欄の高さは、子どもたちの安全や外部からの視線も考慮されている (右上)格子戸を引くとケヤキが美しく組まれた前室空間。そしてリビングの床にはラオス松。木は個性を生かし適材適所に使い分けられる (下右)玄関からもリビングからも出入り自由な和室。建具を閉めることで独立した空間に。土壁中塗り仕上げと磨き丸太の天井が独創的 (下左)上部に優美な桜の絵があらわされた襖



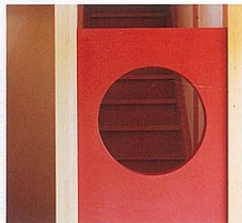
(右)漆喰の壁と洗い出しの土間がすっきりと品のいい玄関ホール。和室の入り口は腰かけて話もできる階段状に。下駄箱の上部は、美しく水にも強いカシュー塗装 (左上)リビングから一段下がった位置に設けた土間キッチン。床はテラコッタタイル (左下)無垢の一枚板のカウンターや赤目の杉板、ベンガラを塗らした漆喰壁など細部まで意匠を凝らした造り。手洗ボウルは鳥取の岩井窯まで足を運んで作っていただいた思い出深いもの



hABITER closeup

ベンガラの仕切り壁

ベンガラの産地として有名な吹屋のある岡山においても、現在ですでに希少価値の高いものとなってしまったベンガラ。しかし、Yさんの家では、ベンガラの赤色が効果的に使われている。なかでも印象的なのが、階段の上り口に設けられたベンガラ漆喰の壁。開放的な一室空間を仕切り、丸窓を設けることでデザイン的に引き締める役目も担っているようだ。



倉敷市Y様邸

- 技を継承する家
- 家族構成/ご主人、奥さま、お子さま2人
- 土地面積/227.78㎡ (68.90坪)
- 延床面積/132.69㎡ (40.13坪)
- 1階/93.89㎡ 2階/38.80㎡
- 建物工法/木造軸組工法



床に座り、天井を仰ぎ見る。そこには、神々しいまでの存在感を持つ十文字の梁が大空間を支えている。横に架けられた梁だけでも強度的には十分だが、交差して架けることで、たゆみや歪みをしなやかに受け止めることができるのだという。スズ弁柄で色づけされ、菜種油で磨きをかけてられた艶やかな黒い地松の梁は、県北の山寺を解体する話を聞きつけて、現地まで直接出向いて入手したもの。「この鱗のような模様は、電気カンナの無かった当時の職人が手でコツコツと刻んだ仕事の跡。こんな立派な梁との出会いは、そうそうあるものではありません」と大久保専務。Yさんと木の深い緑を感じずにはいられない。

ケヤキの一枚板のテーブルが目を惹くキッチン。大久保社長からの提案。リビングから一段下げることで、座って食事をする家族と視線が合うように工夫されている。また、南側に向けて全て開口を設けているため、ウッドデッキを通り和室からリビングへと、ぐるぐると同遊する子どもたちの様子も手に取るようにわかる。

建築中、現場に何度も足を運んだというYさんご夫婦。目をみはるような職人さんの仕事ぶりに、思わず「すごいですね」と声をかけると、帰ってきた答えは「やるべきことをやっているだけです」と、ただ一言。一決して驕ることなく、真面目に、丁寧に、隠れしてしまうようなところでも常に最善をつくす。それがそが住まいの伏見の仕事の流儀なのかもしれない。